

## 平成 30 年度の国内希少野生動植物種の選定について

### 1. 背景

- ・国内希少野生動植物種の指定対象種は種の保存法施行令に規定。
- ・環境省では資料 3 - 1 の基本的な考え方に基づき絶滅のおそれのある種の実態調査等を行い、近年は年間 30～50 種程度の指定を進めてきたところ。

### 2. 今年度の新規指定及び削除候補種について

- ・今般、上述の実態調査等によりエラブオオコウモリ等の 36 種について生息数、分布その他の必要な生息情報が得られ、その保存を図る必要があると認められることから、新たに国内希少野生動植物種として追加する。このうち特定第一種国内希少野生動植物種として 7 種を、捕獲等の規制を適用する卵及び種子として 5 種の卵及び 4 種の種子をそれぞれ指定する。詳細は別紙の通り。
- ・一方、既に国内希少野生動植物種として指定されている鳥類 2 種（シマハヤブサとウスアカヒゲ）について、最新版の環境省レッドリスト 2018 において絶滅（EX）と判断されたことから指定を解除する。これに伴い、種の保存法に基づく国際希少野生動植物種であるハヤブサから除外する亜種のうちシマハヤブサを削除する。

国内希少野生動植物種、そのうち卵・種子採取の規制対象種及び  
 特定第1種国内希少野生動植物種の該当一覧

<今回指定する種(36種)>

○別表第一の表二  
 第一 動物界

分類群	種名	卵・種子の指定	特定第一種
哺乳類	おおこうもり科 1) <i>Pteropus dasymallus dasymallus</i> (エラブオオコウモリ)	-	
	ひなこうもり科 2) <i>Murina ryukyuana</i> (リュウキュウテングコウモリ)	-	
	3) <i>Myotis yanbarensis</i> (ヤンバルホオヒゲコウモリ)	-	
鳥類	うみつばめ科 4) <i>Oceanodroma castro</i> (クロコシジロウミツバメ)	○	
	みずなぎどり科 5) <i>Puffinus bryani</i> (オガサワラヒメミズナギドリ)	○	
爬虫類	とかげもどき科 6) <i>Goniurosaurus kuroiwae sengokui</i> (ケラマトカゲモドキ)	○	
両生類	あかがえる科 7) <i>Odorrana utsunomiyaorum</i> (コガタハナサキガエル)	○	
	さんしょうお科 8) <i>Hynobius tosashimizuensis</i> (トサシミズサンショウウオ)	○	
汽水・淡水魚類	どじょう科 9) <i>Cobitis striata hakataensis</i> (ハカタスジシマドジョウ)		
	10) <i>Cobitis takenoi</i> (タンゴスジシマドジョウ)		
	はぜ科 11) <i>Gymnogobius nakamurae</i> (コシノハゼ)		
昆虫類	こがねむし科 12) <i>Oryctes hisamatsui</i> (ヒサマツサイカブト)		
	とんぼ科 13) <i>Rhyothemis severini</i> (ハネナガチョウトンボ)		
甲殻類	ぬまえび科 14) <i>Paratya boninensis</i> (オガサワラヌマエビ)		
	すながに科 15) <i>Paraleptuca boninensis</i> (オガサワラベニシオマネキ)		

(次ページに続く)

## (別表第一の表二の続き)

## 第二 植物界

種名	卵・種子の指定	特定第一種
おもだか科		
16) <i>Sagittaria natans</i> (カラフトグワイ)		○
ばんれいし科		
17) <i>Polyalthia liukuensis</i> (クロボウモドキ)		
さといも科		
18) <i>Arisaema kawashimae</i> (トクノシマテンナンショウ)		○
すいかずら科		
19) <i>Lonicera kurobushiensis</i> (クロブシヒョウタンボク)		
20) <i>Lonicera uzenensis</i> (ウゼンベニバナヒョウタンボク)		
21) <i>Triosteum pinnatifidum</i> (ホザキツキヌキソウ)		
きく科		
22) <i>Aster asagrayi</i> var. <i>walkeri</i> (ヨナクニイソノギク)		○
おしだ科		
23) <i>Polystichum lonchitis</i> (ヒイラギデンダ)		
ほしくさ科		
24) <i>Eriocaulon seticuspe</i> (ヒュウガホシクサ)		○
ふうろそう科		
25) <i>Geranium shikokianum</i> var. <i>yoshianum</i> (ヤクシマフウロ)		○
まめ科		
26) <i>Crotalaria uncinella</i> (エダウチタヌキマメ)	○	
27) <i>Intsia bijuga</i> (タシロマメ)		
ゆり科		
28) <i>Fritillaria kaiensis</i> (カイコバイモ)		○
らん科		
29) <i>Peristylus lacertifer</i> (タコガタサギソウ)		
いね科		
30) <i>Piptatherum kuoi</i> (イネガヤ)	○	
うらぼし科		
31) <i>Tomophyllum sakaguchianum</i> (キレハオオクボシダ)		
いのもとそう科		
32) <i>Pteris formosana</i> (台湾アマクサシダ)		
きんぼうげ科		
33) <i>Ranunculus pygmaeus</i> (クモマキンポウゲ)		
34) <i>Thalictrum uchiyamae</i> (ムラサキカラマツ)	○	○
あかね科		
35) <i>Randia sinensis</i> (ヒジハリノキ)		
しなのき科		
36) <i>Triumfetta procumbens</i> var. <i>glaberrima</i> (ケナシハテルマカズラ)	○	

(次ページに続く)

<今回削除する種（2種）>

○別表第一の表一  
第一 動物界

分類群	種名	卵・種子の指定	特定第一種
鳥類	はやぶさ科		
	1) <i>Falco peregrinus furuitii</i> (シマハヤブサ)	○	
	ひたき科		
	2) <i>Luscinia komadori subrufus</i> (ウスアカヒゲ)	○	

## 平成30年度新規指定候補種の概要

## ＜哺乳類＞

種名 (学名)	選定要件*	選定理由 (生息状況等)	
1. エラブオオコウモリ ( <i>Pteropus dasymallus dasymallus</i> )  分類：おおこうもり科  環境省RLランク：絶滅危惧IA類 (CR)  固有亜種	ア、ウ	①種の特徴	前腕長 120～140mm、頭胴長 190～250mm で尾がない。体毛は褐色を帯び、頸部は幅広い黄色を帯びた明るい毛帯で取り巻かれる。常緑広葉樹の自然林に主に生息する。夜行性で昼間は木にとまって休み、夜に餌を取りに出かける。
		②分布域	鹿児島県に分布する。
		③存続を脅かす要因	開発等による餌となる植物やねぐらとなる環境条件の不足や減少、土地造成。
		④その他	1975年に国の天然記念物に指定されている。鳥獣保護管理法により、捕獲には許可が必要である。鹿児島市の平川動物園で飼育事例があり、繁殖にも成功している。
2. ヤンバルホオヒゲコウモリ ( <i>Myotis yanbarensis</i> )  分類：ひなこうもり科  環境省RLランク：絶滅危惧IA類 (CR)  固有種	ア、ウ	①種の特徴	前腕長 36～38mm、頭胴長 41～44mm、尾長 46mm 前後。黒みがかかった体毛を持つホオヒゲコウモリで、クロホオヒゲコウモリ ( <i>M. pruinus</i> ) に似るが、かなり大型であり、背側の毛に銀色の金属光沢を持った刺毛がないことで容易に区別できる。常緑広葉樹の自然林に生息する。夜には採餌のために森林内を飛翔し、飛んでいる昆虫類を捕食する。
		②分布域	鹿児島県、沖縄県に分布する。
		③存続を脅かす要因	開発等によるねぐらとなる大木の減少、圃場整備、土地造成、道路工事、ダム建設。
		④その他	鳥獣保護管理法により、捕獲には許可が必要である。
3. リュウキュウテングコウモリ ( <i>Murina ryukyuana</i> )  分類：ひなこうもり科  環境省RLランク：絶滅危惧IB類 (EN)  固有種	ア、ウ	①種の特徴	前腕長 35～38mm、頭胴長 45～55mm、尾長 35～45mm。やや黒っぽいテングコウモリ類で、体色や外部の大きさはコテングコウモリ ( <i>M. ussuriensis</i> ) に近いが、頭骨の大きさはテングコウモリ ( <i>M. leucogaster</i> ) に近い。常緑広葉樹の自然林に生息する。昼間のねぐらは樹洞で、夜は採餌のために森林内を飛翔する。
		②分布域	沖縄県、鹿児島県に分布する。
		③存続を脅かす要因	開発等によるねぐらとなる大木の減少、圃場整備、土地造成、道路工事、ダム建設。
		④その他	鳥獣保護管理法により、捕獲には許可が必要である。「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」の世界自然遺産登録における遺産地域候補地に生息地が含まれる。



## &lt;鳥類&gt;

種名 (学名)	選定要件*	選定理由 (生息状況等)	
<p>4. クロコシジロウミツバメ (<i>Oceanodroma castro</i>)</p> <p>分類：うみつばめ科</p> <p>環境省RLランク：絶滅危惧IA類 (CR)</p>	ア、ウ	①種の特徴	全長20cm、体重31～67g、翼開長43cm。全体が濃い黒褐色で腰は白色、尾羽は切れ込みの浅い凹形である。繁殖は太平洋と大西洋の暖海域の離島で行い、繁殖期以外は外洋に生息する。
		②分布域	岩手県に分布する。国外では、ハワイ諸島やガラパゴス諸島、大西洋のアゾレス諸島、ベルレンガス諸島、マデイラ諸島、セルヴァージュエンス諸島、カーボベルデ諸島、セントヘレナのアセンション島などで繁殖する。
		③存続を脅かす要因	開発行為、ドブネズミによる捕食や営巣場所をめぐるオオミズナギドリ ( <i>Calonectris leucomelas</i> ) との競合。
		④その他	鳥獣保護管理法により、捕獲には許可が必要である。環境省において営巣環境保全等の取組を実施中。
<p>5. オガサワラヒメミズナギドリ (<i>Puffinus bryani</i>)</p> <p>分類：みずなぎどり科</p> <p>環境省RLランク：絶滅危惧IA類 (CR)</p>	ア、ウ	①種の特徴	全長約27～30cm、翼開長約55～60cm、尾長7～8cm、体重約130g。ミズナギドリ類としては小型で、体サイズに対して尾羽が長い。体の上面が黒く、下面が白く、下尾筒が黒い。翼下面の白色部が広く、初列風切羽内弁基部近くに白色部がある。頭部下面の白色部は眼の上側まで達し、嘴と足は青灰色。タコノキの低木林とオガサワラススキの草地が混在する環境に生息する。
		②分布域	東京都に分布する。
		③存続を脅かす要因	外来哺乳類であるクマネズミによる捕食、ギンネムやモクマオウ等の外来植物の繁茂による生息環境悪化。ノネコによる捕食。
		④その他	鳥獣保護管理法により、捕獲には許可が必要である。本種の保護を直接の目的としたものではないが、営巣環境に悪影響を与えるとの情報がある外来植物 (モクマオウ、ギンネム) の駆除事業を実施している。

## ＜爬虫類＞

種名 (学名)	選定要件*	選定理由 (生息状況等)	
6. ケラマトカゲモドキ ( <i>Goniurosaurus kuroiwae sengokui</i> )  分類：とかげもどき科  環境省RLランク：絶滅危惧IB類 (EN)  固有亜種	ア、ウ、エ	①種の特徴	頭胴長はオスで最大88 mm、メスで92 mmに達する。胴背面に横帯と縦条成分を併せ持ち、その色は桃色やオレンジ色など変異に富むものの多少なりとも赤味を帯びること、横帯の間に淡色の小班がみられること、虹彩が赤味を帯びることなどで特徴付けられる。主に常緑広葉樹の自然林や回復の進んだ二次林に生息する。
		②分布域	沖縄県に分布する。
		③存続を脅かす要因	土地造成、道路建設、違法採取。
		④その他	沖縄県の天然記念物に指定されている。種の保存法における緊急指定種に指定されている。環境省が広義マダラトカゲモドキとして生息状況把握及び保全対策検討を行っている。同様に、ノネコによる捕圧が指摘されており、平成29年度に監視カメラを設置。広義マダラトカゲモドキは、欧米のマーケットでは、ペット用の個体が販売されていた事例がある。

## ＜両生類＞

種名 (学名)	選定要件*	選定理由 (生息状況等)	
7. コガタハナサキガエル <i>(Odorrana utsunomiyaorum)</i>  分類：あかがえる科  環境省RLランク：絶滅危惧IB類 (EN)  固有種	ウ	①種の特徴	成体の頭胴長はオスで39～48mm、メスで46～59mm程度。頭胴長に対する四肢の割合は琉球列島の他の同属種に比して小さく、下腿長は普通、頭胴長の49～56%程度。後肢を前屈すると、下腿と足根の間の関節は眼の前縁と鼻孔の間に達する。胴部背面の顆粒は顕著。 山地や丘陵地を流れる河川の上流域で、周囲を常緑広葉樹の自然林に囲まれた場所のみ生息する。
		②分布域	沖縄県に分布する。
		③存続を脅かす要因	常緑広葉樹林の疎林化・灌木林化に伴う生息地縮小。源流域を含む溪流からの取水による生息環境の悪化。
		④その他	ペット専門店のホームページにおいて、野外採集個体と思われる生体の販売を2件確認した。分布域である2島の個体群間の遺伝的差異は比較的大きいことが示されている。
8. トサシミズサンショウウオ <i>(Hynobius tosashimizuensis)</i>  分類：さんしょううお科  環境省RLランク：絶滅危惧II類 (VU) (但し、オオイタサンショウウオとして)  固有種	ア、ウ、エ	①種の特徴	成体の頭胴長は、雄で60～73mm程度、雌で65～69mm程度。成体の背面は一様に暗い緑褐色で明瞭な斑紋は有さない。腹面は背面より明るく、銀白色の小斑を有する。止水産卵性で、1月下旬から4月上旬に、水たまりなどに沈む小枝や石にコイル状の卵嚢を産み付ける。幼生は6～9月に変態して上陸する。越冬幼生は確認されていない。上陸後の幼体と成体は周辺の森林の林床で生活する。
		②分布域	高知県に分布する。
		③存続を脅かす要因	開発や土地利用形態の変化による安定した止水環境の劣化や消失、周辺の森林の劣化や消失、過度の個体採集
		④その他	市町村指定の天然記念物（オオイタサンショウウオとして）。 個体が集中する産卵期の池で乱獲が行なわれると、個体群に壊滅的な影響が及ぶ可能性がある。 繁殖場所となる人工池の設置及び整備、生息域外での保険個体群の管理及び基礎情報の収集を実施されている。

## ＜汽水・淡水魚類＞

種名 (学名)	選定要件*	選定理由 (生息状況等)	
<p>9. ハカタスジシマドジョウ (<i>Cobitis striata hakataensis</i>)</p> <p>分類：どじょう科</p> <p>環境省RLランク：絶滅危惧IA類 (CR)</p> <p>固有亜種</p>	ウ、エ	①種の特徴	<p>成熟体長はオスで50～60mm、メスで60～80mm。口髯は3対。オス胸鰭基部には円形の骨質盤があり、胸鰭第1分岐軟条の上辺は細い。胸鰭～腹鰭間の筋節数は通常13。体色は黄白色で斑紋は暗褐色。躯幹部斑紋L5は11～13個の楕円形もしくは長方形の斑紋による横帯状となり、躯幹部斑紋L4はやや幅の広い網目状縦帯となる。繁殖期の成熟オスでは躯幹部斑紋L3とL5が明瞭な縦条模様に変化し、L4は消失する。尾鰭基部の背側には眼径と同程度の黒色斑紋があり、腹側には同程度の暗色斑が存在するがこれがない個体もいる。尾鰭は3～4列の弧状横帯となる。卵黄径は約1.0mm。</p> <p>河川の中下流域の流れがゆるやかな場所に生息する。とくに岸際に植生が豊富で砂泥底の場所を好む。</p>
		②分布域	福岡県に分布する。
		③存続を脅かす要因	河川開発、河川内湿地の減少、圃場整備にともなう水路の改変、水質汚濁、愛好家等による採集。
		④その他	生息域は二級河川であり、福岡県が河川内の土砂の浚渫を行う際に、専門家の意見に基づき本亜種の生息に配慮した浚渫を実施。
<p>10. タンゴスジシマドジョウ (<i>Cobitis takenoi</i>)</p> <p>分類：どじょう科</p> <p>環境省RLランク：絶滅危惧IA類 (CR)</p> <p>固有種</p>	ウ、エ	①種の特徴	<p>体長は65～85mmであり、オオガタスジシマドジョウやヤマトシマドジョウ種群などと同じ雑種由来の異質4倍体性の種であるが、今のところ両種で見られるような体長120mmを超えるような大型の個体は確認されていない。体側部中央の斑紋は通常点列状でシマドジョウ種群の仲間に似るが、一部のスジシマドジョウ種群の種又は亜種で見られるように、繁殖期のオス個体のみが縦帯状の体側斑紋を示す。成熟したオスは胸鰭基部に円盤状の骨質板を持つ。河川の本流の中流域の限られた範囲に生息しており、支流での生息は確認されていない。</p>
		②分布域	京都府に分布する。
		③存続を脅かす要因	河川開発、愛好家等による採集。
		④その他	生息域は二級河川であり京都府が管理をしている。

種名 (学名)	選定要件*	選定理由 (生息状況等)	
11. コシノハゼ <i>(Gymnogobius nakamurae)</i>  分類：はぜ科  環境省RLランク：絶滅危惧IA類 (CR)  固有種	ウ	①種の特徴	最大全長70mm。形態的に類似したビリンゴやシンジコハゼとは頭部感覚管系の眼上管開孔が無いことで区別できる。平常時の体色は淡褐色だが、繁殖期のメスは全身の体色と背鰭、腹鰭、臀鰭が黒化する。本種はメスの婚姻色が黒色のみで、他のジュズカケハゼ類のように黄色横帯が出ないのが特徴である。オスや未成魚の場合、分布域が隣接するジュズカケハゼ広域分布種（ジュズカケハゼ）と比較すると、吻長や両眼間隔幅、顎長にやや長い（広い）傾向があることで区別可能である。ジュズカケハゼ関東固有種（ムサシノジュズカケハゼ）と富山固有種（ホクリクジュズカケハゼ）とは分布が離れており、本種と関東固有種は尾鰭の総鰭条数（本種35～39、関東固有種29～33）で区別できる。富山固有種とは尾鰭の総鰭条数（富山固有種は32～35）、第2背鰭軟条数+臀鰭軟条数（本種16～18、富山固有種15～17）、背鰭前方鱗数（本種0～5枚、富山固有種は通常27枚以上）によって区別できる。環境省第4次レッドリスト(2013)では、ジュズカケハゼ鳥海山周辺固有種として掲載されていた。 山際のため池や湿地、水路に生息する。
		②分布域	山形県、新潟県に分布する。
		③存続を脅かす要因	丘陵地の湿地等の開発、オオクチバス等の外来種による捕食。
		④その他	現状の生息地は、丘陵地のため池やそれにつながる水路であり、ほとんどが私有地や土地改良区の管理地に該当していると考えられる。

## ＜昆虫類＞

種名 (学名)	選定要件*	選定理由 (生息状況等)	
<p>12. ヒサマツサイカブト (<i>Oryctes hisamatsui</i>)</p> <p>分類：こがねむし科</p> <p>環境省RLランク：絶滅危惧IA類 (CR)</p> <p>固有種</p>	ア、ウ、エ	①種の特徴	<p>体長45～55mm。体色は黒色から赤褐色で個体によって変異がある。雌雄共に頭角を有し、大型の雄では長く発達し後方に強く湾曲する。前胸背板前部は深く陥没し、後縁中央に山状の弱い突起が雄では3つ、雌では2つある（不明瞭な個体もある）。前胸背板の陥没部の周囲には帯状の浅い溝があり、雌ではその後方中央に長方形の浅い窪みがある。上翅の点刻は細かく弱い光沢がある。雌の腹端部には黄褐色の長毛を密生するが、雄では無毛である。</p> <p>繁殖場所となるビロウの枯死木が常に供給されるような大きなビロウ林に生息する。</p>
		②分布域	沖縄県に分布する。
		③存続を脅かす要因	<p>台湾カブトの侵入による種間競争。農地整備や道路設置に伴うビロウ林の減少や分断。外来種であるオオヒキガエルとミヤコヒキガエルによる捕食。</p>
		④その他	<p>平成29年度国内希少野生動植物種及び絶滅危惧種の選定のための調査等委託業務において生息状況調査が実施されている。</p>
<p>13. ハネナガチョウトンボ (<i>Rhyothemis severini</i>)</p> <p>分類：とんぼ科</p> <p>環境省RLランク：絶滅危惧IB類 (EN)</p>	ア、ウ、エ	①種の特徴	<p>成虫の体長は39～47mm。オスはメスよりやや大型。頭部は前面が金属光沢の強い紫藍色で、複眼は未熟な個体では上半部がやや赤みがかかった紫黒色で下半部が黒色だが、成熟個体では上半部が黒っぽい赤紫色となる。翅胸は全体的に金属光沢のある黒銅色、脚部および腹部も黒色で無斑。翅は長く透明で、基部と先端部に黒紫色の目立つ斑紋がある。同属他種とは翅の大半が透けていることと斑紋で容易に区別できる。</p> <p>終齢幼虫の体長は16mm。全体的に丸みを帯びた体型で、体色は淡褐色の地色に濃褐色の斑紋を表す。複眼は小さく、側縁のやや後ろ寄りに丸く膨出する。脚は極めて長く、後腿節は頭幅とほぼ同長かごく僅かに長い。腹部はずんぐりとした卵形。幼虫はベッコウチョウトンボに酷似するが、やや大きめであること以外に確実な識別点は知られていない。</p> <p>平地や丘陵地の丈の高い抽水植物の生育する開放的な池沼や、水田跡に成立した開放水面の見られる湿地に生息する。</p>
		②分布域	<p>鹿児島県に分布する。</p> <p>国外では台湾、ベトナムに分布する。</p>
		③存続を脅かす要因	<p>湿地開発、土地造成、道路建設。外来種による捕食の影響や愛好家による捕獲圧も懸念される。</p>
		④その他	<p>市町村の指定希少野生動物に指定されており、採集が規制されている。</p> <p>日本トンボ学会員個人による生息環境の整備を中心とした保全活動が成果を挙げている。</p>

## ＜甲殻類＞

種名 (学名)	選定要件*	選定理由 (生息状況等)	
14. オガサワラヌマエビ <i>(Paratya boninensis)</i>  分類：ぬまえび科  環境省RLランク：絶滅危惧I類 (CR+EN)  固有種	ウ、エ	①種の特徴	体長10mmほどの小型種。額角は水平で、上縁の歯は11～18（多くは14～17）、下縁の歯は1～4（多くは2～3）。また、卵径が大きい（0.90～1.00mm×0.60～0.65mm）。本州の中部以南に分布するヌマエビ（ <i>Paratya compressa</i> ）に似ているが、第5脚の指節内縁の小棘数が少ない（71本に対して45本）。河川の上流域および源流域において、流れの緩い水域の辺縁部に生息する。
		②分布域	東京都に分布する。
		③存続を脅かす要因	アカギやモクマオウなどの外来植物繁殖による水域の辺縁部の消失。渇水による水域の縮小と、それに伴う貧酸素状態。取水堰による河川の分断化。外来魚であるカダヤシやグッピーによる捕食。
		④その他	東京都が実施した取水堰の土砂除去作業時には一時的に衣装ケースなどに避難し、再度放流する配慮が実施された。 民間の取り組みとして、外来植物対策を実施する際に、水辺のアカギの根抜きも行ったことにより、瀬切れが改善した。 飼育繁殖試験が実施されており、短期間の累代飼育は行われている（2003年頃）。 インターネット上でペットショップの入荷情報が1件確認されている。
15. オガサワラベニシオマネキ <i>(Paraleptuca boninensis)</i>  分類：すながに科  環境省RLランク：絶滅危惧IA類(CR)  固有種	ア、ウ、エ	①種の特徴	甲は台形に近く、最大甲幅23 mm程になる小型種である。甲の色彩は変異が多く、雄では背面が黒色と、青色、灰色もしくは白色のまだら模様であることが多い。また雄の大鉗脚はピンク色～赤色で、両指は薄いピンク色～白色である。 日向と日陰が混在する干潟環境を好むようである。
		②分布域	東京都に分布する。
		③存続を脅かす要因	開発等による生息地消滅。
		④その他	近年では道路や河川の開発工事が実施される際、事前に本種の生息状況確認調査がなされ、本種の生息地に配慮した工事（できる限り基質を取り除かない等）が実施された。

## ＜維管束植物＞

種名 (学名)	選定要件*	選定理由 (生息状況等)	
<p>16. カラフトグワイ (<i>Sagittaria natans</i>)</p> <p>分類：おもだか科</p> <p>環境省RLランク：絶滅危惧IA類 (CR)</p>	ア、ウ	①種の特徴	<p>浮葉性の多年草。外形はオモダカに似るが、オモダカよりも深い所に生える。水底の地中の直立茎に葉を根生する。直立茎から走出枝を出し、その先に長楕円球形で、直径 10～15mm の塊茎をつくる。成長初期は、おもに線形の沈水葉を出し、その後、狭長楕円形、矢じり形、ほこ形の浮葉へと変化する。葉はすべて浮葉になり、葉柄は長さ 30～60cm に達する。浮葉は、矢じり形～ほこ形の時に、長さ 5～12cm、長裂片は側裂片の2～4倍長。花茎は葉柄よりも長く、花序の部分は水面から出る。花序は単純で、花軸は1～2個の節からなる。花は単性で雌雄同株、上方に雄花が下方に雌花が、花茎に3個ずつ2～6段に輪生する。花柄は、雌花が0.5～1cm、雄花が1～2cm。萼片は広卵形、長さ約3mmで、反り返らない。花弁は円形で、白色、長さ約5mm。雄花の雄蕊は多数、葯は黄色。雌花では雌蕊が多数で、花の中央に球形に集まる。瘦果は広倒卵形で長さ約3mm、花柱が短く突出する。花期は、日本では7～8月。湖沼や河川の水中の泥中に生育。</p>
		②分布域	<p>北海道、岩手県に分布する。 国外では、朝鮮、中国、サハリン、極東地方、シベリア、ヨーロッパに分布する。</p>
		③存続を脅かす要因	<p>水質汚濁、外来種（ウチダザリガニ）による影響、産地局限</p>
		④その他	<p>地元自治体と環境省自然保護官事務所が生物多様性協議会を作り、保全対策を実施。 日本植物園協会加盟園1園で保有。 北大植物園で域外保全を実施しており、増殖技術は確立済。</p>
<p>17. クロボウモドキ (<i>Polyalthia liukiensis</i>)</p> <p>分類：ばんれいし科</p> <p>環境省RLランク：絶滅危惧IA類 (CR)</p>	ア、ウ	①種の特徴	<p>常緑高木。高さ8m～10mほどになる。幹は直立し、黒褐色。葉は革質で互生し、葉柄は長さ5～10mm、葉身は長楕円形、長さ15～25cm、幅6～10cm、上面は光沢があり、無毛、先は尖り、基部はややゆがんだ鈍形。花期は8月頃、葉腋に1～6個の花をつける。花序の軸は長さ1～1.5cm、花柄は長さ2～3cm、無毛または短毛が散生。花弁は6枚、はじめ緑色でのちに黄緑色、細長い披針形で長さ6～7cm。萼片は3枚、円形または三角状円形で、長さ3～5mm、短毛が散生する。分果は楕円形で長さ2～2.5cm、幅約1cm、液質で黒熟する。種子は枕形、長さ2～3cm。外観はイランイランノキ (<i>Cananga odorata</i> (Lam.) Hook.Thoms.) に似るが、雄蕊の形が異なる。 低地の琉球石灰岩地の自然林内に生育。</p>
		②分布域	<p>沖縄県に分布する。海外では台湾に分布する。</p>

種名 (学名)	選定要件*	選定理由 (生息状況等)
		<p>③存続を脅かす要因 各種開発、農地造成、自然災害、生育環境の悪化、産地局限</p> <p>④その他 市町村条例指定希少野生動植物種。 生育地は以下に含まれる。 ・市町村指定天然記念物 日本植物園協会加盟園5園で保有。</p>
<p>18. トクノシマテンナンショウ (<i>Arisaema kawashimae</i>)</p> <p>分類：さといも科 環境省RLランク：絶滅危惧IA類 (CR)</p> <p>固有種</p>	<p>ア、ウ、エ</p>	<p>①種の特徴 夏緑の多年草。高さ50cmに達する。雌雄偽異株で雌株から雌株に完全に転換する。地下に球茎があり、多数の腋芽はほぼ2列に並び、子球に発達する。2月頃、休眠芽が地上に伸び出し、花序と葉をほぼ同時に展開する。鞘状葉は革質で偽茎と同色。葉は深緑色で、通常2枚、偽茎部は長さ14~32cm、淡紫褐色の斑が目立ち、開口部は襟状に開がる。葉柄部は偽茎部より短く9~14cm、葉身は鳥足状に分裂し小葉間には葉軸がやや発達する。小葉は9~13枚、狭楕円形で全縁。花序柄は少なくとも花時には葉柄部とほぼ同長か短く、仏炎苞は紫褐色または黄褐色で白い縦条が目立ち、筒部はやや細い円筒形、口辺部の耳垂はよく発達し広く開出し、舷部は筒部より長く、細長くて前屈、三角状卵形~狭卵形で先が長く尖る。花序付属体は細棒状で、仏炎苞口部から明らかに外に出る。開花は3月上旬。ハウチワテンナンショウによく似るが、仏炎苞の舷部が長く、花序付属体が細く、染色体数が2n=28であるので区別できる。形態分類は花の構造によって行う。 岩がちの湿った林下または林縁の半日陰地に生育。</p> <p>②分布域 鹿児島県に分布する。</p> <p>③存続を脅かす要因 園芸採取、踏みつけ、自然遷移、産地局限</p> <p>④その他 市町村条例指定希少野生動植物種。 地元保全団体が巡視を実施。 日本植物園協会加盟園1園で保有。 オークション出品あり。 種子による再生産(有性繁殖)が課題。</p>
<p>19. ヨナクニイソノギク (<i>Aster asagrayi</i> var. <i>walkeri</i>)</p> <p>分類：きく科 環境省RLランク：絶滅危惧IB類 (EN)</p> <p>固有種</p>	<p>ア、エ</p>	<p>①種の特徴 常緑の多年草。茎は下部から分枝して斜上、高さ15cmくらいになる。根生葉はやや肉質でへら形、両面とも茎とともに軟毛を密につける。茎葉は長楕円形、茎上部になるほど小さくなる。頭花は淡紫色で、直径3cm前後、枝先に単生する。 海岸の断崖地に生育。</p> <p>②分布域 沖縄県に分布する。</p> <p>③存続を脅かす要因 園芸採取、自然災害による生育地の消失、産地局限</p> <p>④その他 日本植物園協会加盟園2園で保有。 播種による増殖が可能。</p>

種名 (学名)	選定要件*	選定理由 (生息状況等)	
<p>20. クロブシヒョウタンボク (<i>Lonicera kurobushiensis</i>)</p> <p>分類：すいかずら科</p> <p>環境省RLランク：絶滅危惧IA類 (CR)</p> <p>固有種</p>	ア、ウ	①種の特徴	高さ1mほどの落葉低木。葉は狭卵形～狭楕円形、長さ1.5～6cm、幅1～3cm、先端は鋭形、基部はくさび形～円形、葉柄は長さ2～5mm、葉の両面と葉柄に長毛と黄色い短腺毛がある。花冠は長さ5～6mm、二唇形。花筒は長さ約4mm、密毛があり、距がある。萼筒は長さ2mm、短腺毛がある。イボタヒョウタンボクやキタカミヒョウタンボク (EN) に似るが、小苞は基部から1/2まで合生し、花柄は短く長さ5mmで、萼裂片が卵状三角形で、先端は鋭形。夏緑林内、気温の低い風穴の周辺に生育。
		②分布域	山形県、宮城県に分布する。
		③存続を脅かす要因	森林伐採、自然遷移、産地局限
		④その他	
<p>21. ウゼンベニバナヒョウタンボク (<i>Lonicera uzenensis</i>)</p> <p>分類：すいかずら科</p> <p>環境省RLランク：絶滅危惧IA類 (CR)</p> <p>固有種</p>	ア、ウ、エ	①種の特徴	高さ1mほどの落葉低木。葉は卵形～楕円形、長さ3～8cm、幅1.5～4cm、先端は鋭形～鋭尖形、基部はくさび形～やや切形、葉柄は長さ4～7mm、上面脈上に長い伏毛と赤い短腺毛がある。花冠は長さ約7mm、二唇形。花筒は長さ約4mm、距がある。萼筒は長さ3mm。苞は2個、長さ1～2mm。ベニバナヒョウタンボク (VU) に似るが、果実は紡錘形で、直径6～7mm、長さ約1cm、基部から1/4まで合生し、萼筒が基部で合生し、花柄、花冠、苞、萼筒に赤い短腺毛があり、萼裂片が三角形、先端は鈍形。山地の風穴に生育。
		②分布域	山形県に分布する。
		③存続を脅かす要因	園芸採取、人の踏みつけ、自然遷移、生育地の環境変化 (風穴周辺の温度上昇)、産地局限
		④その他	挿し木での増殖が可能。
<p>22. ホザキツキヌキソウ (<i>Triosteum pinnatifidum</i>)</p> <p>分類：すいかずら科</p> <p>環境省RLランク：絶滅危惧IA類 (CR)</p>	ア、ウ	①種の特徴	多年草。茎は叢生し、高さ約30cm、全体に開出する長軟毛を密生し、上部に短腺毛がある。葉は4対あり、上部の2対は接近して輪生状となり、倒卵状菱形で、長いものは12cmに達し、羽状に中裂し、裂片は鋭尖頭、基部は広いくさび形となる。花は6月。穂状花序は直立し、柄を含めて長さ2～5cm。花は無柄、萼には5歯があり、花冠は筒状、斜めに開出し、長さ約10mm、淡緑色、裂片は短く、内側は褐色を帯びる。石果はほとんど球形、径8mm、熟すと白くなり、多汁質。核は3個、卵形で両凸形。山中、山地の林床に生育。
		②分布域	山梨県に分布する。 国外では中国に分布する。

種名 (学名)	選定要件*	選定理由 (生息状況等)	
		③存続を脅かす要因	シカ食害、自然遷移、結実率の低下、産地局限
		④その他	地元自治体、地元保全団体により保全対策を実施。日本植物園協会加盟園1園で保有。インターネット販売あり(海外。学名で流通。)
23. ヒイラギデンド <i>(Polystichum lonchitis)</i>  分類：おしだ科  環境省RLランク：絶滅危惧IB類(EN)	ア、エ	①種の特徴	<p>常緑性シダ。時期を外れると赤茶色となるものが多いことから推測すると落葉性の可能性がある。</p> <p>根茎は直立～斜上。葉柄は長さ2.5～4.3cm、淡緑色。葉を叢生し、葉質は堅い革質、葉縁には、小さな鋸歯と先端が刺状になる大きな鋸歯がある。葉身は1回羽状複生、長楕円状披針形で長さ13～17cm、幅2.5～3.1cmである。鱗片は、葉柄には長さ7.1～8.7mm、淡褐色のものが、基部でやや密、それより上ではまばらにつき、葉身には長楕円状披針形、淡褐色の鱗片がつく。孢子嚢群は円形、直径1.1～1.3mmのものが、中肋寄りにつく。</p> <p>類似種のキタダケデンドは葉面が狭三角形～三角形、羽片が三角形～卵形で10～15対あり、鱗片が少なく、関節が通常葉柄の(最)上部にあるものに対し、本種は葉面が狭披針形、羽片が披針形で20～25対あり、葉の裏面に鱗片が多く、関節が通常葉柄の中部にあるという特徴を合せもつ。</p> <p>倍数性は日本産では未知、外国産では2倍体有性生殖の報告がある。</p> <p>高山のやや陰湿な岩隙や岩礫地に生育。標高約3,000～3,100m付近の高所で、日陰となる北向き斜面の岩場や、日が多少当たるような場所でも岩の割れ目に生育しており、日当たりが良い環境には生育していない。</p>
		②分布域	山梨県に分布する。国外では、ロシア、中国、南アジア、中央アジア、ヨーロッパ、北米に分布する。
		③存続を脅かす要因	園芸採取、自然遷移
		④その他	<p>南アルプス国立公園の指定植物(「クモイカグマ(ヒイラギデンド)」で指定)。</p> <p>「山梨県希少野生動植物種の保護に関する条例」の指定希少野生動植物種(ヒイラギデンド(クモイカグマ)で指定)。</p>

種名 (学名)	選定要件*	選定理由 (生息状況等)	
24. ヒュウガホシクサ ( <i>Eriocaulon seticospe</i> )  分類：ほしくさ科  環境省RLランク：絶滅危惧IA類 (CR)  固有種	ア、ウ、エ	①種の特徴	草丈10~15cmほどになる小型の1年草。ホシクサに似て、葉は束生し、線形で3脈がある。総苞片と花苞とは灰白色、洋紙質でやや厚く、硬く丈夫で、先が芒状に長く尖る。雌花は花弁を欠き、萼片は2個で舟形、背部に狭い翼があることでホシクサと区別できる。 丘陵地の湿原に生育。
		②分布域	宮崎県に分布する。
		③存続を脅かす要因	水質汚濁(富栄養化)、園芸採取、自然遷移
		④その他	地元自治体、地元保全団体に保全対策を実施。種子増殖は可能。 レッドリスト2017でカテゴリーEXからCRに変更。
25. ヤクシマフウロ ( <i>Geranium shikokianum</i> var. <i>yoshiianum</i> )  分類：ふうろそう科  環境省RLランク：絶滅危惧IA類 (CR)  固有種	ア、ウ	①種の特徴	夏緑の多年草。基本種イヨフウロ ( <i>G. shikokianum</i> ) は、茎は高さ30~70cmになり、葉柄と共に開出またはやや下向きのあらい毛がある。葉身は幅4~10cmで、掌状に5中~深裂し、裂片には数個の不揃いの大きな鋸歯があり、表面と縁及び裏面脈上にあらい毛がある。托葉は膜質、褐色で、合生して広卵形となり、長さ8~10mm。花は紅紫色で径2.5~3cm。花柄及び小花柄には開出または下を向くあらい毛が多い。萼片の長さは芒とともに8~10mmで、3~5脈があり、開出毛を散生する。花弁は基部の縁にだけ白毛がある。 本変種は上記のイヨフウロに比し、全体が小さく矮生で、葉は毛を密生して葉身の幅は1~3cm、花は径約2~2.5cmである点が異なる。また、花弁はイヨフウロと異なりほぼ白色で、紫色の筋が目立ち、高さ20~30cm。花は7~9月頃咲く。 高地の草原や路傍、山頂等の開けた場所や、岩場に他の植物に混じって生育。
		②分布域	鹿児島県に分布する。
		③存続を脅かす要因	産地局限
		④その他	屋久島国立公園の指定植物。オークション出品あり。

種名 (学名)	選定要件*	選定理由 (生息状況等)	
26. エダウチタヌキマメ <i>(Crotalaria uncinella)</i>  分類：まめ科  環境省RLランク：絶滅危惧IA類 (CR)	ア、ウ	①種の特徴	常緑の多年草、または茎下部が木化して亜低木状になり、枝の上部はしばしば横臥する。高さ 20～60cm。葉は 3 小葉、托葉は長さ 1～2mm、反曲する。葉柄は 1～1.5cm、小葉は狭楕円形から倒卵形、鈍頭から凹頭、表面無毛、裏面には短毛があり、頂小葉は側小葉より大きく、長さ 1.5～2.5cm、幅約 1cm。総状花序は頂生または腋生、4～12 花がつく。花は黄色、長さ 5～7mm、萼は長さ 3～4mm、5 深裂し、裂片は長さ約 2mm。花弁は長さ 5～6mm、萼より長く、雌蕊は有柄、花柱は雄蕊筒から長く抽出する。豆果はほぼ球形から広楕円形で長さ 5～6mm、幅 4～5mm、短毛でおおわれ、淡褐色の 2 種子を含む。 海崖の風衝地のチャートの岩壁に生育。
		②分布域	沖縄県に分布する。海外では、台湾、中国、ベトナム、タイ、マレーシア、インドに分布する。
		③存続を脅かす要因	公園整備などの開発、産地局限
		④その他	日本植物園協会加盟園 1 園で保有。
27. タシロマメ <i>(Intsia bijuga)</i>  分類：まめ科  環境省RLランク：絶滅危惧IA類 (CR)	ア、エ	①種の特徴	常緑高木。高さ 20m 以上に達する。葉は 1～2 対まれに 3 対の小葉からなる偶数羽状複葉で、葉軸は長さ 2～7cm。小葉は広楕円形または楕円形、円頭または凹頭、長さ 7～15cm、幅 4～9cm、革質で厚く、光沢がある。5～6 月、枝先に長さ 6～10cm の円錐状の花序が頂生し、白色または淡紅色の花をつける。花弁は元々 5 枚だが、1 枚だけが大きく発達し、他の花弁は退化してしまう。花弁は長さ約 13mm、白色または淡紅色。豆果は長さ 10～25cm になり、長楕円形または広線形、扁平で黒褐色に熟し、3～6 個の平たい種子を入れる。 海岸や河口近くの岩が多い斜面に生育。ときに波打ち際近くの砂質の平地にも生育。
		②分布域	沖縄県に分布する。海外では、台湾、中国南部、東南アジア、インド、ポリネシア、オーストラリア、マダガスカルに分布する。
		③存続を脅かす要因	建築材・家具材としての伐採、産地局限
		④その他	市町村条例指定希少野生動植物種。 日本植物園協会加盟園 1 園で保有。 オークション出品あり。

種名 (学名)	選定要件*	選定理由 (生息状況等)	
<p>28. カイコバイモ (<i>Fritillaria kaiensis</i>)</p> <p>分類：ゆり科</p> <p>環境省RLランク：絶滅危惧IB類 (EN)</p> <p>固有種</p>	ア、ウ、エ	①種の特徴	<p>多年草。早春に開花し初夏には枯れる。葉は下部では対生し上部は3輪生し、葉は暗緑色または主脈に沿って白斑がある。アワコバイモ (VU) やコシノコバイモに似ているが、花は半開で杯状鐘形、蜜腺の位置は基部の近く 1/6~1/3 のところにあり、蜜腺の長さは4~8mm。花被片は1.2~1.5cm、長楕円形で先端が鋭り、斑紋はなく、ぼんやりした程度。また花被片の中肋にはコシノコバイモのような突起がなく、縁にもふつう突起がないが、まれに多細胞性の突起が見られる。花期は3~5月。実生から6、7年で開花する。種子にはエライオソームをもち、アリにより散布される。</p> <p>丘陵地~山地にかけて主に落葉広葉樹の林床に生育。スギ植林地にも生育するが、薄暗いため生育状況は不良である。</p>
		②分布域	東京、山梨、静岡県に分布する。
		③存続を脅かす要因	森林伐採、園芸採取、管理放棄、自然遷移、産地局限
		④その他	<p>「静岡県希少野生動植物保護条例」の指定希少野生動植物。</p> <p>富士箱根伊豆国立公園の指定植物</p> <p>静岡県では、地元自治体、地元保全団体が保全対策を実施。</p> <p>実生での増殖は可能。</p> <p>オークション出品、インターネット販売あり。</p>
<p>29. タコガタサギソウ (ヒュウガトンボ) (<i>Peristylus lacertifer</i>)</p> <p>分類：らん科</p> <p>環境省RLランク：絶滅危惧IA類 (CR)</p>	ア、ウ、エ	①種の特徴	<p>小形の常緑の多年草。地中に楕円形の塊根があり、2~4枚の葉を根生する。葉は長さ2.5~8cm、狭長楕円形~広披針形。茎葉は6~8個あって、広線形、茎に圧着する。総状花序は頂生し、長さ30cmになり、10~20個の花をつける。花は白色で平開せず、径3mm、距は緑色、長さ1.5mm、萼片と花弁は長さ4mm。唇弁は3浅裂し、唇弁の側裂片は中央裂片と同じ長さで、近縁種のタカサゴサギソウ (<i>P. formosanus</i>) のように糸状に長く伸びることはない。花期は8~9月。</p> <p>日当たりのよい丘陵地の湿気のある草原、自然林あるいは二次林の明るい林床に生育。</p>
		②分布域	九州に分布する。海外では、台湾、中国南部、フィリピンに分布する。
		③存続を脅かす要因	土地造成、道路工事、観賞用採取、管理放棄、湿地の乾燥化、産地局限

種名 (学名)	選定要件*	選定理由 (生息状況等)	
		④その他	熊本県指定自然環境保全地域の野生動植物保護地区の保護すべき野生動植物に指定。 日本植物園協会加盟園1園で保有。 オークション出品、インターネット販売あり。
30. イネガヤ <i>(Piptatherum kuoi)</i>  分類：いね科  環境省RLランク：絶滅危惧IA類 (CR)	ア、ウ	種の特徴	密に束生する多年生草本。本種は冬季に葉の上部が枯れたようになるが、地上部すべてが枯れるわけではなく、下部は緑が残っている。常緑ともいえないが、完全に葉を落とすわけではない。稈は高さ60～100cm。葉は扁平で狭線形～線形で長さ10～25cm。やや光沢があり、辺縁はざらつく。円錐花序は直生、狭総状、長さ10～20cm。包穎は第2包穎がやや大きいほぼ同長で、5～7脈があり円頭。小花は包穎とほぼ同長で、護穎は革質で狭卵形、黒褐色で光沢があり、先端に早落性の長い芒がある。穎果は長さ4mm程度で、両端はとがり黒褐色で光沢がある。小穂は先端が肥大した小梗を持つ。 古生層の石灰岩地の林内に生育。
		②分布域	沖縄県に分布する。海外では、台湾、中国に分布する。
		③存続を脅かす要因	森林伐採、除草剤の散布、人の踏みつけ、産地局限
31. キレハオオクボシダ <i>(Tomophyllum sakaguchianum)</i>  分類：うらぼし科  環境省RLランク：絶滅危惧IB類 (EN)  固有種	ア、イ	①種の特徴	小形の常緑性シダ。根茎は斜上、鱗片は卵形、黄褐色のものが密についている。葉柄は長さ0.5～0.7cm、褐色～黒褐色で有毛。葉身は1回羽状全裂、披針形、長さ5.1～6.3cm、幅0.9～1.1cm、鈍頭、緑色、薄い紙質で有毛。側羽片は長楕円状広披針形、長さ0.4～0.6cm、幅0.2～0.3cm、17～27対で辺縁は鈍鋸歯縁である。孢子嚢群は円形～長楕円形のもので葉身の先端側から裂片の側脈上に1裂片あたり1～数個つく。オオクボシダに似るが、裂片の上側に2～3の鋸歯があり、全形がオオクボシダより大きく、葉は羽状にほぼ全裂し、葉脈は羽状に分岐する点で区別できる。 空中湿度の高い森林内の樹上や岩上にコケに混じって生育。
		②分布域	本州（関東地方・中部地方・紀伊半島）、九州（熊本県）に分布する。
		③存続を脅かす要因	河川開発、園芸採取、シカ食害、生育地の乾燥化、自然災害、産地局限

種名 (学名)	選定要件*	選定理由 (生息状況等)	
		④その他	秩父多摩甲斐国立公園の指定植物。 九州中央山地国定公園の指定植物。 五木五家荘県立自然公園(熊本県)の指定植物。 「埼玉県希少種野生動植物の種の保護に関する条例」の希少野生動植物種。 埼玉県では、地元専門家に依頼して巡視を実施。
32. タイワンアマクサシダ ( <i>Pteris formosana</i> )  分類：いのもとそう科  環境省RLランク：絶滅危惧IA類(CR)	ア、ウ	①種の特徴	常緑性シダ。根茎は斜上し、鱗片があり、葉を相接して生じる。葉柄は長さ34~52cm、ほぼ無毛~無毛、黄褐色~赤褐色で光沢がある。鱗片は長さ3.8~6.5mm、茶褐色、線状披針形。葉身は2回羽状複生、卵形から卵状披針形。長さ52~79cm、幅25~42cm、鋭頭~鋭尖頭、しなやかな革質で緑色。葉軸は黄褐色~赤褐色。側羽片は長さ21~27cm、幅5.6~12cm、12~15対で狭三角形。羽状分岐をしたものが3~7対と、単生のものが2~4対ある。最下羽片は両側に小羽片をつけるが、それ以外の側羽片では後ろ側には1~2個の小羽片をつけるのみ。孢子囊群は線形で裂辺の辺縁につく。外国産で2倍体有性生殖の報告がある(日本産では未知)。 暖地の山麓林縁にある石灰岩の岩上や壁面に生育。
		②分布域	鹿児島県に分布する。海外では、中国、台湾に分布する。
		③存続を脅かす要因	ダム建設、産地局限
		④その他	市町村条例指定希少野生動植物種。 地元保全団体が巡視を実施。

種名 (学名)	選定要件*	選定理由 (生息状況等)	
<p>33. クモマキンポウゲ (<i>Ranunculus pygmaeus</i>)</p> <p>分類：きんぽうげ科</p> <p>環境省RLランク：絶滅危惧IA類 (CR)</p>	ア、エ	①種の特徴	<p>矮小な多年草。根生葉は数枚つき、腎円形、黄緑色で、鈍い光沢がある。根生葉は長さ4~8mm、幅5~12mm、葉身は3中裂~深裂し、裂片には粗い鋸歯がある。葉柄は長さ3~20mm、無毛または白色の軟毛がある。茎の中部には小型の葉を1~2枚つける。茎は分岐せず、高さ1~8.5cm、まばらに白い軟毛が生え、花後伸長し長さ30cmほどになる。8~9月に咲くが、花期は雪解けの時期に大きく左右される。花の直径は5~6mmで、黄色。花弁は5個、狭倒卵形で、長さ2.3~4.3mm、幅0.8~2mm。花弁の蜜腺は小型のコップ形で約0.2mm、付属体はない。そう果は卵形、長さ約1mm、無毛、嘴は多少とも屈曲する。花柄は花期には長さ3~5mmだが、果期には3~5.5mmに達し、白色の軟毛が密生する。萼片は5個、楕円形で、長さ約3mm、幅約2mmで淡紫色を帯びる。萼片の背軸側に白色の軟毛がある。石灰岩砂礫地でかつ遅くまで雪が残る斜面に生育。</p>
		②分布域	富山、長野
		③存続を脅かす要因	園芸採取、人の踏みつけ
		④その他	<p>中部山岳国立公園の指定植物。 八ヶ岳中信高原国定公園の指定植物。 インターネット販売あり。</p>
<p>34. ムラサキカラマツ (<i>Thalictrum uchiyamae</i>)</p> <p>分類：きんぽうげ科</p> <p>環境省RLランク：絶滅危惧IB類 (EN)</p>	ア、ウ、エ	①種の特徴	<p>繊細で無毛の多年草。根は紡錘状に肥厚する。茎は高さ15~40cm、直立し、上部で1~2回分枝する。花期に根出葉が1個あり、2~4回3出複葉、小葉は倒卵形~広倒卵形、基部が心形になる。長さ幅とも1.5~3cm、あらい鋸歯があり、葉柄は長さ10~20cm、小托葉はない。花期は5~6月。花序は5~6花で散房状、径1.5~5cm、花柄は長さ0.3~0.5cm。萼片は倒卵形、長さ2~3mm、濃紫色、早落性。雄蕊は長さ3~5mm、葯は長さ0.6mm、白色、花糸は棍棒状で花糸より幅広く、葯隔は突出しない。瘦果は2~3個、長さ4mm、紡錘形、扁平、3脈があり、長さ2mmの柄があり、開出する。花柱は長さ0.3~0.5mm、柱頭は卵形。染色体数2n=14。岩礫地や山地帯上部~亜高山帯下部の疎林の林床に生育。</p>
		②分布域	長崎県に分布する。海外では、朝鮮半島南部に分布する。
		③存続を脅かす要因	園芸採取、踏みつけ、シカ・イノシシの食害

種名 (学名)	選定要件*	選定理由 (生息状況等)	
		④その他	西海国立公園の指定植物。 「長崎県未来につながる環境を守り育てる条例」の指定種。 日本植物園協会加盟園3園で保有。 オークション出品、インターネット販売あり(学名での販売あり)。
35. ヒジハリノキ <i>(Randia sinensis)</i>  分類：あかね科  環境省RLランク：絶滅危惧 IB類 (EN)	ア、ウ	①種の特徴	直立またはややつる状の常緑低木。高さ1~4m。枝に短伏毛またはやや開出する毛が散生~やや密生し、側枝が出ていない葉腋には側枝の変形した鋭い直刺があり、長さ0.5~1cm。葉は対生、長楕円形~楕円形、鋭尖頭、基部はくさび形で、長さ3~10cm、幅1~4cm、表面は葉身基部の主脈上に短伏毛がある以外はほとんど無毛、裏面には短伏毛が散生し、特に脈上と側脈基部にある穴型のダニ室に多い。葉柄はやや密に伏毛があり、長さ3~5mm。花は2月~5月、花序は頂生し、枝先の短い集散花序に十数個~数十個の花を密につける。花冠は白色、筒部は細く、長さ15~20mm、外面は無毛、内面に軟毛が生え、先は5裂または4裂し、裂片は狭長楕円形で鋭尖頭、長さ5~6mm、幅2.5~3mm。雄蕊は長さ2~4mm。花柱の先は棍棒状になり、長さ2~2.5cm。果実は球形の液果で径約8mm、先に萼裂片の落ちた跡が輪状に残り、黒く熟す。 石灰岩地の低地林内に生育。
		②分布域	沖縄県に分布する。海外では、台湾、中国南部、ベトナムに分布する。
		③存続を脅かす要因	低地林開発、土地造成、公園整備、産地局限
		④その他	日本植物園協会加盟園2園で保有。

種名 (学名)	選定要件*	選定理由 (生息状況等)	
36. ケナシハテルマカズラ ( <i>Triumfetta procumbens</i> var. <i>glaberrima</i> )  分類：しなのき科  環境省RLランク：絶滅危惧 IA類 (CR)	ア、ウ	①種の特徴	常緑低木。茎は地をはい、節から根を下ろして広がる。茎全体に星状毛が密生する。葉は互生、葉柄は長さ1~3.5cm、葉身は広卵形または卵円形でときに浅く3裂し、長さ1~3cm、幅1~4cm、縁に先のやや鈍い鋸歯があり、先は鈍く、基部は円形または浅心形、葉の下面は母変種のハテルマカズラは星状毛を密生し灰白色となるが、本変種では星状毛は少ない。7~9月、葉腋またはその反対側から長さ1~2cmの花序を伸ばし、1~3花を散形につける。苞葉は2~3枚が1か所に集まり、線形で長さ2~3mm。萼片は5枚、広披針形で先は爪状にとがり、長さ7~8mm。花弁は黄色で5枚、倒長卵形、長さ8~10mm。果実は球形、径1.0~1.2cm、母変種では果実全面に開出する剛毛が密に生える長さ約3mmの刺が多数あるが、本変種では刺の毛は少ない。林縁の道路脇法面や堤防のコンクリートの隙間に生育。
		②分布域	沖縄県に分布する。海外では、ミクロネシアに分布する。
		③存続を脅かす要因	開発行為、産地局限
		④その他	日本植物園協会加盟園1園で保有。挿し木での増殖が可能。

※選定要件について

○希少野生動植物種保存基本方針(平成30年4月17日環境省告示第38号)(抄)

第二 希少野生動植物種の選定に関する基本的な事項

1 国内希少野生動植物種

(1)国内希少野生動植物種については、その本邦における生息・生育状況が、人為の影響により存続に支障を来す事情が生じていると判断される種(亜種又は変種がある種にあっては、その亜種又は変種とする。以下同じ。)で、以下のいずれかに該当するものを選定(絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(平成四年法律第七十五号。以下、第八を除き「法」という。)に基づく指定ではなく、同法に基づき指定すべき種を選定を指す。以下同じ。)する。

ア その存続に支障を来す程度に個体数が著しく少ないか、又は著しく減少しつつあり、その存続に支障を来す事情がある種

イ 全国の分布域の相当部分で生息地等が消滅しつつあることにより、その存続に支障を来す事情がある種

ウ 分布域が限定されており、かつ、生息地等の生息・生育環境の悪化により、その存続に支障を来す事情がある種

エ 分布域が限定されており、かつ、生息地等における過度の捕獲又は採取により、その存続に支障を来す事情がある種

※「②分布域」の「現状不明」の記載について

該当の種の生息・生育記録がその地域にあるものの、現時点では現存が明確に確認できていない分布域については、地名の後に「現状不明」と記載した。

## 平成 30 年度国内希少野生動植物種の選定に関する検討会における

## 各候補種に対する意見概要

1. 日時：平成 30 年 9 月 18 日（火） 13:30～16:30

## 2. 出席者

## ＜検討委員＞（五十音順 敬称略）

石井 信夫 東京女子大学 現代教養学部 教授  
 石井 実 大阪府立大学 理事・副学長  
 尾崎 清明 公益財団法人山階鳥類研究所 副所長  
 角野 康郎 神戸大学 名誉教授  
 白山 義久 国立研究開発法人海洋研究開発機構 特任参事 【ご欠席】  
 成瀬 貫 琉球大学 熱帯生物圏研究センター 准教授 【ご欠席】  
 藤井 伸二 人間環境大学 人間環境学部 准教授  
 細谷 和海 近畿大学 名誉教授  
 松井 正文 京都大学 名誉教授  
 矢原 徹一 九州大学大学院 理学研究院 教授 【ご欠席】  
 横田 昌嗣 琉球大学 理学部 教授  
 米倉 浩司 東北大学大学院生命科学研究科 助教

## ＜事務局＞

堀上 勝 環境省 自然環境局 野生生物課 課長  
 番匠 克二 環境省 自然環境局 野生生物課 希少種保全推進室 室長  
 奥田 青州 環境省 自然環境局 野生生物課 希少種保全推進室 室長補佐  
 杉山 昇司 環境省 自然環境局 野生生物課 希少種保全推進室  
 指定検討第二係長  
 田中 里奈 環境省 自然環境局 野生生物課 希少種保全推進室  
 指定検討第一係  
 一般財団法人 自然環境研究センター

## 3. 各候補種に対する意見概要

44 種について検討したが、分類学的な問題や保全管理のあり方に課題がある等の理由で選定すべきでないという意見が出された種があった。今回科学委員会に提示した候補種に係る意見は次のとおり。

#### 【哺乳類】

- ・エラブオオコウモリ、リュウキュウテングコウモリ、ヤンバルホオヒゲコウモリについて、指定は妥当である。ただし、他の候補種もある中で、これらの種を優先して指定した理由や優先順位の基準を明確にしたほうが良いだろう。

#### 【鳥類】

- ・クロコシジロウミツバメ、オガサワラヒメミズナギドリについて、指定は妥当である。
- ・シマハヤブサ、ウスアカヒゲの指定解除については、特に異存はない。

#### 【爬虫・両生類】

- ・ケラマトカゲモドキ、コガタハナサキガエル、トサシミズサンショウウオの指定は妥当である。なお、地元の団体が保全活動をしている種について、国が指定することで保全がされなくなってしまうことが懸念されるため、そこは調整いただきたい。

#### 【魚類】

- ・ハカタスジシマドジョウ、タンゴスジシマドジョウ、コシノハゼとも指定は妥当である。ただし、他の候補種もある中で、これらの種を優先して指定した理由を整理して説明すべきである。

#### 【昆虫類】

- ・ヒサマツサイカブト、ハネナガチョウトンボとも指定は妥当である。いずれの種も危機的状況にあるため保全対策が必要である。

#### 【甲殻類】（委員ご欠席のため、事務局による事前意見の読み上げ）

- ・オガサワラヌマエビ、オガサワラベニシオマネキとも指定は妥当である。いずれの種も生息地の調査や生息環境の保全、域外保全の検討が必要である。

#### 【維管束植物】

- ・タイワンアマクサシダについては、人工増殖が可能かはわからない。自生地は立ち入りが難しいところで、原因は不明であるが、20年前と比べて相当個体数が減っている。指定は妥当である。
- ・トクノシマテンナンショウについては、盗掘によって個体数が少なくなっており、非常に危ない。指定は妥当である。
- ・クロボウモドキ及びタシロマメについては、採取は無いが、自生地がかなり開

発されており、指定によって自生地の開発が抑制される可能性がある。指定は妥当である。

- ・イネガヤについては、減少要因が人の踏みつけや除草剤の散布であり、種の保存法で指定するとしても、有効な対策がとれるか検討が必要。また、自生地には大きく分けて2集団あるが、1集団は踏みつけや除草剤散布により減少しており、もう1集団は個体数が非常に少ない。  
→対策について、指定後に、草刈りや除草剤使用の際の自生地への配慮について、現地事務所を通じてお願いしたいと考えている。(環境省)
- ・ヒジハリノキについては、開発のおそれがあるため、指定は妥当である。
- ・クロブシヒョウタンボク及びウゼンベニバナヒョウタンボクについては、いずれも風穴地の限られた場所にあり、指定は妥当である。特にウゼンベニバナヒョウタンボクは極端に個体数が少なく、近縁種とは生態的にも形態上からも明らかに異なっている。
- ・タコガタサギソウについては、和名や学名などに混乱はあるが、実体ははっきりしていることから、その点をきっちり説明した上で指定は妥当である。
- ・エダウチタヌキマメについては、個体数は非常に少ない。開発抑制の効果を見込んで、指定は妥当である。
- ・ケナシハテルマカズラについては、近縁種は点々とあるが、今まで混生している自生地は見たことがなく、形態的にも明瞭に区別ができる。本種は、自生地が1箇所のみで、希少な種であることに変わりはなく、指定は妥当である。
- ・ヨナクニイソノギクについては、花がきれいであり、採取されるおそれがある。自生地が限られており、なおかつ台風などで崖崩れが起きる可能性もあるため、指定は妥当である。
- ・キレハオオクボシダについては、それほど急いで指定する必要は無いと思うが、指定自体には問題はない。
- ・カラフトグワイ、クモマキンポウゲ、ヤクシマフウロ、カイコバイモ、ホザキツキヌキソウ、ヒイラギデンダ、ヒュウガホシクサ、ムラサキカラマツについては、指定は妥当である。

以上